

A Song for Every Season 地誌学的再考

——自然環境と農業——

湯 山 健 一

I. はじめに

1950年代よりイングランドにおける民衆音楽復興運動を牽引してきた中心人物のひとりであるボブ・コパー (Bob Copper, 1915-2004) 氏は、民謡が長年に亘って代々唄い継がれてきた背景を知るいわゆるソース・シンガー (source singer) の代表格であり、彼の執筆した処女作 *A Song for Every Season* (1971) は、ボブ氏が幼少期を過ごした20世紀初頭の農村生活に関する記憶と、父親が19世紀後半の若かりし日々について書き残した手記をもとに、サセックス (Sussex) 州の小村ロッティンディーン (Rottingdean) における1年間の時の巡りを農事や娯楽の変化を辿りながら活写したエッセイで、出版当時大きな反響を呼んだだけでなく、現在も版を重ねて広く読まれ続けている (拙稿, 2015, pp. 170-172)。筆者は、ボブ氏が天寿を全うされた後、ご遺族の寛大なお許しと多大なご協力を得て、12の月に分けて綴られた同書本文の日本語訳を行わせていただいた (拙稿, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019a & 2019b)。本稿は、その過程において導き出された19世紀末から20世紀初頭のロッティンディーンにおける生活文化の詳細を総括し、イングランド南部にあるこの小さな村で、どのような人文景観が如何なる要因にもとづいて構成されてきたのか、地誌学的な観点から再考するものである。筆者はこれまでも、郷土という切り口で、1920年代における農村コミュニティ崩壊以降の民衆音楽のリヴァイヴァルなどを介した想像の共同体 (imagined village) を求める動きなどに焦点を当てた検討 (拙稿, 2003) を行っ

てきたが、本稿ではとりわけこの地域の主たる生業のひとつ、農業という側面に焦点を当てた考察を試みる。

II. 立地・地形・水利

グレート・ブリテン島の南岸に位置するロッティンディーンは、海峡に面した小さな村である。行政区分上は、シティ・ステイタス (City Status) を有するブライトン・アンド・ホヴ (Brighton and Hove) のなかに含まれているものの、その中心部からは4マイルほど東にあって、今尚、都市の喧騒を逃れた農村の佇まいを醸している。イングランド南部は、丁度ロンドンを南北から取り囲むようにダウンズ (Downs) と呼ばれる白亜の大きな丘陵が緩やかにうねりながら広がる地形をしているが、ドウヴァーから南岸を西に延びるサウス・ダウンズの上にこの村はある。

ロッティンディーンの近隣には、ウディンディーン (Woodingdean) やソルトディーン (Saltdean) など、古英語で「谷」を表す dean という語を含んだ地名が多く見受けられる。これらは、その名が示すとおり何れもダウンズの窪地に形成された谷間^{たにあい}の集落である。この一帯は石灰質の土壤であるため水持ちが悪く、近くに大きな川こそ流れてはいないものの、その代わり地下に浸透して蓄えられた豊かな伏流水を井戸や池から得ることが出来る。石灰岩から染み出したカルシウムを多く含んだ強めの硬水 (hard water) ではあるが水質は良かったようで、ボブ氏の幼少期の回想に依れば、彼の祖父、ブラッサー・コパー (James 'Brasser' Copper, 1845-1924) 氏の管理していたチャロナーズ農場 (Challoner's Farm) の池には、毎週、方々の醸造業者が、蒸気機関で駆動するトラックのような荷台付の大きな車で水を汲みにやって来ており、その返礼として、ブラッサー氏は年間を通して樽入りのビールを受け取っていたという (拙稿, 2019b, p. 178)。硬水はビール醸造には本来あまり適さないとされるが、イングランド南部の醸造業者は長年の知識と経験によってその活かし方を心得ていたようである (Homebrew

Brighton, 2022)。

ロッティンディーンは海に面してはいるものの漁業は盛んでなかった(Copper, B., 1997, p. 3)。舟を着けるのに適した入り江がなかったため、ボブ氏の記述にも3月の箇所、西のブライトンの海辺でニシンを、東に隣接するソルトディーンのさらに東にあるニューヘヴン(Newhaven)では漁師から廉価でホタテ貝を手に入れる様子(拙稿, 2016, p. 65)が描かれるなど、魚介類を村内でなく近隣の町村に求めていることがわかる。9月の項にも、沖合でロブスター漁を行う男たちの歌声が村の海岸通りまで聞こえてきていた(拙稿, 2019a, pp. 140-141)という回想があるが、民謡「歓喜の極み／水夫と恋人(Pleasant and Delightful/A Sailor and His True Love)」を唄いながら罾籠を引き上げていたこの漁師たちもまた、おそらくは村の男たちではなかったものと思われ、ボブ氏もやや距離を置いた描き方をしている。基本的に、ロッティンディーンの生業は、農業と牧羊業であった。

III. 土 壤

サウス・ダウンズに限らず、白亜の丘の上に広がる大地は、地表が削られて緩やかにうねる独特の美しい景観を創り上げるものであるが、表土が浅いため、農業を行うための土としては決して肥沃とは言い難い。しかも、この層の薄い土壌には、かつて火打ち石として広く用いられていたフリント(flint)が無数に埋まっており、春先の種撒き前には、畑に埋まったこの石を拾う作業も行われたようである。これは主に農夫見習いの少年たちや年配の農夫たちに任されており、種撒きの終わった畑に目を配り、クラッパーズ(clappers)というお手製の道具で大きな音を立ててカラスの群れから種を守る大事な役目を果たす傍ら、彼らはひたすらに石を拾い続けた(拙稿, 2016, pp. 62-64)。激しい俄雨にわかあめが降るたびに表土は洗い流され畑の表面には新たなフリントが姿を現すため、「年輩の農夫のなかには、フリントが他の作物と同じように数を増やすばかりでなく大きく成長するものだと信じ込ん

でいる者すらいた」(*ibid.*)というボブ氏の回想は、滑稽とも思える一方で、これが如何に骨の尾折れる作業であったかを如実に物語っている。どれだけ拾っても次から次へと石が姿を現す、終わりの見えない気の遠くなりそうな作業であったことであろう。フリントはケイ素の固結した石であるため非常に固く、掘り出された後は一カ所に集められて建築資材や道路の補修などに用いられていた。

こうした水持ちの悪い浅い表土で穀類や野菜を栽培するには十分な施肥が不可欠である。これには家畜の糞が用いられていた。20世紀前半のロッティンディーンには羊の放牧場が5つ、馬小屋と乳牛小屋が合わせて9つあり、優に荷車200台分を越える糞が、一旦教会の裏手の空き地に山積みされ、ここから村のすべての畑へ馬車で運ばれ、季節労働の農夫たちも交えて畑へ均していったという(拙稿, 2019b, pp. 173-174)。肥やしはブライトンからも届き、これらは畑の一面に山積みされた後、またそれぞれの畑へ運ばれた(*ibid.*)。

このように、ロッティンディーンの農夫たちは、何世紀にも亘って土のなかから手作業で一つひとつフリントを取り除き、毎年肥やしを撒いて、農業に適した大地を育ててきたのである。

IV. 気 候

ロッティンディーンは、北緯50.8度というその緯度の低さ故、イングランドで最も日照時間の長い村のひとつである。イギリス気象庁(Met office, n.d.)によると、2020年におけるイングランド南部の年間日照時間は1763.2時間で、イギリス全土の平均1498.9時間、緯度の高いスコットランドの1239.0時間に比べると遙かに長く、15度も緯度の低い京都市の年間日照時間、約1775時間(京都市, n.d.)と大差ない。無論、毎年同程度の日照時間が得られているとは限らず、例えば、2021年などは1492.8時間(*ibid.*)と短く、年毎に大きな変動を示すことはあるものの、ロッティンディーンから最も近

い観測点であるイーストボーン (Eastbourne) の年間日照時間は、1981年から2010年の30年間の平均で1888時間 (Current Results-weather and science facts, 2022) と、イングランド南部でも群を抜いており、この一帯がイギリス諸島のなかで極めて温暖な気候に恵まれた土地であることがわかる。

かくして、春の播種が終わり、草を刈って干し草を作る5月の農作業に関するボブ氏の「美しく晴れ渡った朝で、日はすでに高く、焼け付くように暑い日になる」(拙稿, 2017, p. 28) といった描写などは、あたかも真夏の猛暑を思わせるようなものとなっているが、イギリス気象庁のデータを辿ると、ロッティンディーンに近いイーストボーンの夏の最高気温は、1960年代に入っても摂氏20度を上回る日は数えるほどで、2022年現在でも最も暑かった日の気温はせいぜい23度程度 (Met office, *op. cit.*) である。日本人の感覚からすればとても「暑い」という表現が該当するような気温には思えないが、日向で長時間続く農作業には辛い気温であったということなのであろう。

イギリス政府 (GOV. UK, n.d.) の発表によると、同国における1884年から2020年間の間の年間平均気温上昇幅はおよそ1.5度で、データを遡れば、19世紀後半からの百年間においてさほどの気温変化は認められず、昨今の気温上昇がほぼ1980年代以降の半世紀におけるものであることは明白である。降水量についても同様の傾向が確認され、1884年から約百年間、イギリスの年間降水量は1,100ミリ前後と大きな変化は見られない一方で、1980年頃を境に、気温上昇と比例して降水量も増加の一途を辿り、2020年現在、年間1,200ミリに至る勢い (*ibid.*) で、地球温暖化の深刻な影響が垣間見られる。

一般に、年間降水量が1,100ミリから1,200ミリの間に収まり、雨期も無いため湿度が極端に高まる時期もなく、夏の最高気温は24度未満、冬も氷点下を下回ることなど殆ど無い気候とは、人間にとって極めて穏やかで過ごしやすいものと言える。イングランドの天候は「一日のうちに四季がある (Four seasons in one day)」と形容される如く目まぐるしく変化し続けるが、これはイギリス諸島が海洋性気候 (maritime climate) の帯域にあるためで、外

海に面したイングランド南岸では陸へ吹き付ける風の影響が顕著である。ロッティンディーンもその類いに漏れない。

自然と向き合いながら農作業を行う者たちにとって、天候の変化を読み取りこれに的確に対応していくことが、秋の豊かな実りには不可欠である。天気予報が新聞やラジオを通じて伝えられるようになる20世紀半ばまで、農夫たちの頼みはすべて経験則であった。父から聴いた話としてボブ氏は、11月の朝、西の空に「ふわふわした白い小さな雲の一群」が見えると、数時間後には沖合から雨が襲来する予兆であるから、皆、午前で畑の仕事を切り上げていたという逸話（拙稿, 2019b, pp. 169-170）を書き残しているが、これなどはこの地域の農夫たちが共有していた天候の変化の予兆を読み取る経験則の好例であろう。この西の空の雲のことをサセックスでは、文字通り雨の到来を知らせる「使いの者たち (messengers)」(*ibid.*) と称していた。他にも、雌羊たちが出産期を迎える2月の太陽を「まやかしの黄金色 (counterfeit gold)」と形容し、一見暖かな春の日がやってきたと見えても「日が長くなるほど寒さは募る」ということを経験的に弁えていた（拙稿, 2015, p. 180）例なども氏の著書には示されており、農夫や羊飼いたちが相貌的知覚を駆使して自然と向き合いながら生業を営んできた様子がよくわかる。

この土地で古来、彼らは農業と牧羊業を営んできた。汗水垂らして懸命に働く「羊飼い (tender of sheep)」と「農夫 (planter of corn)」という組み合わせは、コパー家が唄い継いできた「若き相棒 (Two Young Brethren)」という歌にも描かれており、この土地で農夫の家に生を受けた男たちが、何れかの仕事の担い手として生きてきたという地域的な背景に合致している。おそらくは、『創世記』第3章19節の 'In the sweat of thy face shalt thou eat bread' や 同 第4章2節の 'And Abel was a keeper of sheep but Cain was a tiller of the ground' などを下敷きにした歌詞と推測される (The Copper Family, 1995, p. 105 ; 拙稿, 2019a, pp. 143-146) が、この歌を口ずさむ農夫や羊飼いが、自らの生業あるいは人生そのものと歌を重ね合わせて

いたであろうことは想像に難くない。

ボブ氏は、こうした親から子へと継承される農耕のあり方は、数世代どころでなく遙か太古の昔からの連続性を有するものと考えており、その根拠として、「14世紀に作られたラトレル詩篇の挿画」に描かれた牛2頭を一組に繋ぐための軛くびきが19世紀末に使用されていたものと瓜二つであった（拙稿、2016, p. 70）こと、さらには「10世紀のサクソン人の大修道院長、エルフリック（Aelfric, c. 955-c. 1010）」の逸話で語られる、「ひとり1日1エーカー」という耕作面積の目安が千年後の19世紀末でもまったく同じであった（*ibid.*, pp. 72-74）ことなどを挙げている。千年以上もの間、農夫ひとりに見習い小僧ひとりが付いて、古来変わらぬ形状くびきの軛で組まれた牛2頭を操りながら春先に畑を鋤き返し、「今と同じこのサセックス丘陵地帯の土から生活の糧を得ていた」（*ibid.*, p. 74）というボブ氏の主張も強ち的外れとは言えない。

V. 労働環境

イングランドに5歳から10歳までの義務教育制度が導入されたのは1880年、その無償化が実現したのは1891年のことである。ボブ氏の父で、1882年生まれのジム氏（James Dale Copper）も5歳になると村の小学校へ通い始めた（拙稿、2015, pp. 173-174）。その後、初等教育の年限は12歳まで拡大されたが、当時のイングランドでは貧しい家庭にまでこれを徹底することはなかなか難しかったようで、ジム氏の手記にも「1892年、11歳のときにオレは学校をやめて、だいぶ歳のいったジョン・ヘンティっていう名の羊飼いのところで世話になり、羊飼い見習いとしてロッティンディーンの農場で働き始めた」（*ibid.*）との述懐がある。農夫の家に生まれた男の子は、19世紀末においても依然として「小さな大人」（アリエス、1980, pp. 18-34）だったのであり、収入が得られるようになれば、親たちの判断によって労働を開始するという慣行に変わりはなかったようである。父親に真新しいジャックナイフ

を買い与えられたジム氏は、「一夜のうちに、11歳の小学生から、ピカピカに磨かれたブーツを履いて、「メシの入ったバスケット」を携え、生け垣から切り出して作ったばかりのまっすぐなハシバミの杖を手に、この先ほんのわずかとはいえ家計に一助を為し得る11歳の稼ぎ手へと成長を遂げた」（拙稿、*op. cit.*）のであった。因みに、農業に従事していたのは、収穫期などに家族総出で村にやって来る季節労働者（swoppers：サセックスの方言で、収穫を行う人の意。麦類の収穫に用いる小鎌（swop hook [標準的には swap-hook] に由来する。）などを除けば、ジム氏の言う「日雇いの連中（roadsters：同じくサセックスの方言で、仕事を求めて遠方から道を歩いてやって来る人々）」も含めほぼ男たちであった（拙稿、2018, pp. 166-169）。

古来、農業をはじめ労働とは、夜明けから日没までの間に行われるものであったが、産業革命を経た19世紀後半に至ると、世界はすでに時計に管理されるようになっていた。但し、懐中時計を持ち歩く者は、階級の異なる地主や、農場の管理を任されていたボブ氏の祖父のような人物にまだ限られており、ロッティンディーンの農夫たちの多くは、平日6時間おきに時を告げるセント・マーガレット教会（St Margaret's Church）の鐘の音を頼りにしていた。ボブ氏の記述にも、朝の6時（拙稿、2015, p. 185）と夜の12時（拙稿、2017, p. 30）の鐘への言及がある。この教会にある2つの鐘は何れもグロスター州の著名な製造業者、ジョン・ラドール（John Rudhall）の手になるものであり、そのうち古い方については1791年に製作されたとの記録（Elphick, 1970, p. 114; Institute of Historical Research, n.d.）があり、ボブ氏も、その父も、そのまた父も日常的に耳にしていた鐘の音が、今も尚、村には響き渡っているということになる。

月曜日から土曜日まで6日間は朝から晩まで働き、日曜日のみ丸一日休みというのが20世紀初頭までの一週間の生活のリズムであった（拙稿、2016, pp. 76-77）。季節ごとに作業自体も一日の労働時間にも変動はあったようであるが、農村の繁忙期に当たる収穫の時期について、ボブ氏の父、ジム氏は

次のように書き残している。

「収穫作業の報酬はビールじゃなくて、藁山作りの酒代 (hayng beer money) ってことで現金が支給された。朝6時から夜8時までの作業さ。午前10時から10時半まで半時間の軽食 (lunch) 休憩、午後は1時から2時までが食事 (dinner) 休憩、5時から5時半までビールかお茶付きの軽食 (bate : bait とも綴られ、サセックスの方言で、農夫が取る午後の軽食を指す。通常は強めのビールとともに供される。) 休憩だったから、都合12時間の労働で、一日当たり2シリング4ペンスの給金と酒代1シリング8ペンスの、合わせて4シリングになった。」(拙稿, 2019a, pp. 142-143)

このように、19世紀末から20世紀初頭へかけての農村における労働は、すでに時間単位で管理されていた。

VI. 農 業

ヨーロッパの他の地域同様、ロッティンディーンにおいても主要作物は麦類、なかでも小麦が現在に至るまで最も広範に栽培されてきた。羊の出産期に当たる2月を過ぎた3月から、麦類の種撒きが始められたようであるが、どのタイミングで開始するかは、まさに農夫たちの経験則に基づいていた。些か長文ではあるが、ボブ氏の描写を以下引いておきたい。

「……とにかく、そのまさに当日の朝が訪れると、もはや誰に教えて貰う必要もありません。それが前日までと同じ晴れの日でないことはすぐにわかります。大地も海も空も、私たちを取り巻くすべての気が変わるのです。晴天はそうした大きな変化のうちのひとつの要素に過ぎません。朝早く、イースト・ヒルの大きな肩越しに朝日が顔を覗かせると、

南から暖かな空気が村へ流れ込みます。淡青色の海の鏡を、細波すら立てることなくするすると滑ってやって来た微風ほどの勢いすら持たぬ暖かな暖気です。その空気には独特のやさしいやわらかさがあり、大地はあたかも冬の眠りから目を覚ましたかのように、再び深く大きく息を吸い込み始めるようです。遙か南方から北上してきた春がイングランドの戸口に立ち、ドアをノックしてなかに招き入れられるのを待っています。大地に霜が降りなくなり、日ごとに日差しが強まって南斜面の褐色の耕地が焼きたてのパンのように湯気を上げ始めると、そろそろ春小麦の種撒きの支度を始めなければならないと農夫は感じ取るのです。」(拙稿, 2016, pp. 58-59)

農夫たちが相貌的知覚によって自然環境の変化を感得し、播種の時期の目安を得ていた様子がここには巧みに描き出されている。気温や湿度、風速や日照時間といった客観的計測値が示されずとも、農夫たち自ら様々な気候の変化を読み取り、播種に最適な時期を知り得たのである。

1. 農 場

ロッティンディーンには、合計で3,000エーカーの農地があったと言われ、この広大な農地を、ポブ氏の長男、ジョン・コパー氏 (John Copper, 2004, p. 5) によれば、400年の長きに亘って代々ビアド家 (Beard family) が所有していた。この家系について辿り得る最も古い記録は、ロッティンディーンで1522年にリチャード・ジョージ・ビアド (Richard George Beard, 1492-1526) の長男としてジョン・エドワード・ビアド (John Edward Beard, -1563) が生まれた (Ancestry, 2022) というものであり、これに鑑みれば19世紀末から20世紀初頭にかかる時点で、少なくとも400年はこの一帯の土地を所有していたと見て良いであろう。ポブ氏の父、ジム氏が若かりし時代を過ごしたこの世紀の変わり目に、ロッティンディーン土地を所有してい

たのは、タイトルにもある通り治安判事 (justice of peace) の任にもあったステニング・ビアド氏 (Mr. Steyning Beard, J. P.) であった (Bevendean History Project, n.d.)。1845年にオウヴィングディーン (Ovingdean) に生を受けた氏は、1870年に南の隣村ロッティンディーンの大邸宅、ダウンハウス (Down House) を購入して移り住み、1909年末にこの世を去る5年前までこの村に暮らし、自らも農業に関わりながら村と人々を見守り続けた (*ibid.*)。ロッティンディーンだけでなく、オウヴィングディーン、さらに北のファルマー (Falmer)、そしてその西のテルスコウム (Telscombe) をも抱える大地主であったステニング・ビアド氏は、狩猟愛好家 (sportsman) としても名高く、ブルクサイド・ハリアーズ (Brookside Harriers) という猟犬の団を飼育し、沢山の会員を集めて、多いときは60頭もの馬が野を駆けるこの著名な狩猟団の長を務めていたという (拙稿, 2019a, pp. 149-150)。

ステニング・ビアド氏の所有するロッティンディーンの農地は、複数の農場に区分されていたが、そのうち *A Song for Every Season* に言及があるのは、セント・マーガレット教会の北にあったチャロナーズ農場と、教会の裏手、東側に広がっていたコート農場 (Court Farm) (拙稿, 2015, p. 185) の2つである。コパー家の人々に限らず、農夫たちはどこか特定の農場だけで仕事をしていた訳ではなく、仕事のあるところへ手配をされていたようである。

ビアド氏の下で、1884年からチャロナーズ農場の経営を任されていたのが、教会の北側にあるチャロナーズ・マナー (Challoner's Manor) を住まいとしていたウィリアム・ブラウン氏 (Mr. William Brown) である。15世紀にまでその起源を辿ることの出来るジョージアン様式に改装されたマナー・ハウス (Copper, J., 2004, p. 4) に暮らしていた氏の名は、ボブ氏の父の手記や回想にも幾度か登場する (拙稿, 2015, p. 174; 2016, p. 77, 2018, p. 159)。この農場主、ブラウン氏の下で、ボブ氏の祖父、ブラッサー・コパー氏は、

「長年に亘り農場管理人 (bailiff) として1,000エーカーの耕地に50人以上が働くこの大農場の運営という重責を担い、頑丈なコブ種の馬に跨ってこの土地を駆け巡って」(拙稿, 2016, p. 63) いた。ジョン氏によると、彼の曾祖父に当たるブラッサー氏が管理していたのは、正確には、常勤の農夫が65名、曳き馬36頭、雄牛2組に鋤が各8の合計16台、牧草地が2,000エーカーと、耕地1,000エーカーであった (Copper, J., *op. cit.*, p. 2)。1853年、齢わずか8歳にして農場で働き始めた一介の農夫の息子が、他の農夫たちに毎朝その日の仕事の指示を出す農場管理の仕事を任されるに至ったのには、1863年、18歳のときに弟のトーマス (Thomas) とともに夜間学校へ通い、読み書き勘定を身につけたおかげだと言い、弟も後にはロッティンディーンでパブを経営するまでになっている (*ibid.*)。ポブ氏は、著書でブラウン氏を農夫たちに寛容な農場主として描いているが、住まいだけ比較しても、農場近くの小さなチャロナーズ・コテージ (Challoner's Cottage) に家族で暮らす農場管理人 (*ibid.*, p. 4) とは大違いで、その階級差は歴然としていた。

2. 小麦

ロッティンディーンの農場で生産される作物と言えば、今も変わらず先ず以て小麦 (wheat) である。主要な穀物という意味合いから、日常的にもまた民謡の歌詞のなかでも “corn” と形容されることも多いこの作物の種が撒かれるのは大凡3月で、かつては羊たちの出産期に続いて訪れる重要な農事であり、そのタイミングは先掲の通り経験則に基づいていた。霜の降りていない秋冬の日々に鋤のかけられた畑に麦の種を撒く作業には、スキャター・ボード (scatter-board) という機具が使用されていた (拙稿, 2016, pp. 60-61)。これは、手前の細長い箱に通された数本のワイヤーを動かすことによって麦粒を弾き出し、籠を滑らせて均等に地面へ撒いていくという道具で、種をまっすぐ撒いていくためには、畑の土を均して準備を整えておく必要があった (*ibid.*)。これには車輪の5つついたプレッサーが用いられ、ジム氏

によれば、農夫ひとりに見習いの少年がひとりついて馬3頭に引かせ、1日5エーカー（5 acre = 20,234.3m²）をこなし、小麦の種が土のなかへもぐり込んでほどこよく埋まっていくよう、畑に溝を切っていったという（*ibid.*）。

1往復で1ロッド（1 rod = 5.5yards = 5.0292m）の幅で種を撒くことの出来たスキャター・ボードを使って1日に播種が可能であった面積は12エーカー（=12×160 square rods = 48,562.32m²）であったと言ひ、小麦の場合は、1エーカーにつき5ブッシェル（5 bushel = 約181.8 litre）ずつ入った袋を12袋（合計60ブッシェル）、オート麦の場合は4ブッシェル（約145.5 litre）ずつ入った袋を15袋（合計60ブッシェル）撒いて12エーカーの播種を行った（*ibid.*）。播種の直後には、前述の通りカラスに種籾を食べられてしまわないよう、馬鋤で土をかけて埋めていく作業が続き、効率よく短時間で終えるため、「2つ1組に結わえてスキャター・ボードの倍の幅」にした木製の馬鋤を馬4頭を横並びにして引かせた（*ibid.*）。馬に指示を出す農夫は、ジム氏によれば、この一日の作業で都合12マイルほどを歩いた計算になるという（*ibid.*）。

こうした農場における小麦の播種の作業が終わると、農場の一面では、農夫ひとり当たり「1エーカーに3袋」ということで自家用の小麦を栽培することが地主から許されていた（拙稿, 2016, p. 61）ようで、農村コミュニティにおける階級間の暗黙の了解が垣間見られる。

温暖なロッキンディーンの場合、6月の羊毛刈り、7月の干し草作りを経た8月が小麦の収穫期に当たる。ジム氏によれば、20世紀に入ると、少しずつ、自動で刈り入れを行うと同時に刈った麦を束ねていく「セルフ・バインダー（self binder）」という機械が導入されるようになっていったものの、麦類の大半は依然として鎌で刈っていたという（拙稿, 2018, pp. 166-169）。収穫は好天を見計らって一気に行わなければならない作業であったため、先にも触れた季節労働者や日雇いの労働者などが近隣の町村から集められたが、毎年恒例のことである故、多くは顔なじみであった（*ibid.*）。ジム氏の手記

には、毎年この時期に隣州ケント (Kent) からやって来るジョージ・リード一家の様子が記されているが、曰く「いつも、おっかあやら、息子3人に娘まで、家族総出でやって来てて、まるでホリデーに来たような風だった」そうである (*ibid.*)。言うまでも無く、生きていくための糧を手にするためにやって来た彼らは懸命に仕事に勤しみ、長じた二人の息子たちは、収穫用の小鎌 (swop hook) を持って麦を刈っては自ら束ね、父親のジョージが大鎌を振ると、刈り取られた麦を娘が束ね、幼い息子は、父の刈った麦をレーキで掻き集めて紐の上に置き、後ろからついてくる母親がその紐で麦を束ねて結わえていくといった手はずで夕方7時頃まで働き続け、相当な量を片づけて行ったという (*ibid.*)。この一家は、農場の穀倉を寢床にして連日収穫作業に従事していたが、ケント州特産のホップの収穫が始まると聞きつけると、即座にホップ摘みに戻って行くというのが常であった (*ibid.*)。

徐々に農村の機械化は進展していったが、初期のバインダーは内燃機関を用いたものではなく馬に曳かせることによって動力を得ていた。初期型には、「1台につき馬が3頭と人が3人必要だった」とのことで、この場合、機械の前方に平行に突き出た2本の轆ながえをその間に並んで入った2頭が引っ張り、そのさらに前にいる曳き馬 (trace-horse) に見習いの少年が跨がって馬たちに指示を出して進むことで動力を得て、後ろに引いた刈り入れ機が麦を刈り取っては台の上に引き上げ、台の上で大きな扇風機のように回転する5枚のレーキを調整することで台の上に並んだ麦を片方に寄せ、一組にして台から落とし、バインダーで束ねるという仕組みで、この機械を使うと1日に6エーカーほどの刈り入れが出来たという (*ibid.*)。ジム氏が20世紀初頭に初めて目にしたバインダーは、その一部が現在ドイツのジーメンス (Siemens Group) 傘下にあるホーンズビー (Hornsby's = Richard Hornsby & Sons, 1828-1918) 社のもので、細工を施した大きな木箱のような機械を、2頭立てを2列に並べた4頭の馬に引かせるものだったそうで、ジム氏曰く、「デカ過ぎるし扱にくい」上、「うまく束になるのは3回に1回って感じ」

だったそうである (*ibid.*)。但し、機械の進化は日進月歩で、5フィート6インチ幅で刈り取った麦をきっちり束ねていく鋼鉄製で高性能の小型バインダーが登場するにはさほどの歳月は要しなかった (*ibid.*)。

ジム氏が一人前の農夫として収穫作業に臨むようになった頃、チャロナーズ農場には馬に曳かせるバインダーが5台あり、農夫たちは「1エーカー当たり2シリング6ペンス」という出来高払いの仕事としてこれを請け負っていた (*ibid.*)。3人一組で1台のバインダーを扱い、1日8エーカーをこなせば丁度1ポンド、すなわちひとり当たり6シリング8ペンスの収入になったが、雨露で湿った麦は刈り取ることが出来ないため、そのような悪天候の日の埋め合わせ分をもう1エーカーこなしておきたいというのが、農夫たちの考え方であった (*ibid.*)。当時、ロッティンディーンの農場では400ないし500エーカーの小麦を作付けしていたと言い、すべて機械で刈り取っても10日から2週間は要したようである (*ibid.*)。

干し草作り同様、炎天下での作業には水分補給が欠かせない。ボブ氏は著書で、農場管理人を務めていた祖父が、収穫作業の際には、昼前になると若い農夫ひとりに声をかけてビア・ジャグを手渡し、度数が低めで喉の渇きを癒やすのには適した類いのビールを2ガロンほど買いに行くよう命じていたことを回想している (*ibid.*, pp. 171-172)。昼時になると、農夫たちは皆で輪になって腰を下ろし、麦の刈り束の叢にもたれかかってこのビールで食事を流し込んだようであるし、午後もし詰まった時分には半時間ほど作業の手を休めて軽食をとる時間があって、子供を連れた農夫の妻たちや若い女性たちが、畑仕事をする亭主や交際相手のところへお茶とケーキにリンゴなどを畑まで運び、各々相手と一緒に腰を下ろして^{しば}暫し憩いのひとときを楽しんでいたという (*ibid.*)。

収穫され束ねられた小麦は、暫く畑に置いて乾燥させるため藁山に組まれる。ジム氏によると、ロッティンディーンの農場では藁山積み (stack-builders) の作業を4つの組に分けて行っていたようで、1組に大人の男た

ちが7人と、見習いの少年たちが3人という構成で一日一山、「小麦の藁山は直径が7ヤードぐらいの円形に、オート麦のときは縦横それぞれ8ヤードと5ヤードの長方形に……それぞれ荷車20台分でこしらえた」（拙稿，2019a, pp. 142-143）そうである。こうして畑で乾燥の進んだ小麦は、冬になると脱穀に回される。

脱穀は、11月以降の冬場に農場の納屋で行われた。脱穀機導入以前、穀竿を用いた脱穀を任されるのは、ロッティンディーンの農場の場合どの納屋でも毎年同じ人物というのが慣例で、必要に応じて時折、手伝いの人員を加えながら、冬の期間の大半を費やして作業が行われた（拙稿，2019b, pp. 164-166）。脱穀用の穀竿は各自で^{こしら}えたるもので、多くの場合、持ち手になる方はハシバミをまっすぐきれいに切り出した竿で、もう一方の紐で結わえて対になるスウィングル（swingle：サセックスでは swingel とも綴り、ジム氏の手記では彼らの発音に沿って swinjul と記載されている。）にはヒイラギが用いられていた（*ibid.*）。ポプ氏は、「2本の棒を結び合わせるためのスイヴェル・キャップ（swivel cap）には、ピロードトネリコの木材から切り出した小さな板を、沸騰したやかんから吹き出す蒸気で蒸して曲げ、形を整えて作りましたし、スウィングルをスイヴェル・キャップに縛り付ける組紐（knit band）は、革の紐か、ときには乾燥させたウナギの皮（eel-skin）」（*ibid.*）を用いてたと記しているが、近隣に大きな川のない地勢を鑑みれば、後者は海で捕れた大型の穴子の皮であった可能性が高い。身体中埃まみれになる上、操作を誤ったり紐が切れたりすると後頭部を強打する危険も伴う過酷な作業であったため、ほぼ全員が、頭にぴったりした縁なしの頭蓋帽か、スコットランド発祥の大きめのベレー帽のようなタモシャント（tam o'shanter）を被っていたという（*ibid.*）。脱穀作業に当たる農夫にはいつも見習いの小僧たちが付いて、ねじ錐（wimble）を使って藁束を作ったり、籾殻を吹き飛ばしたりして作業の補助に当たっていた（*ibid.*）。

20世紀に入ると、籾殻を吹き飛ばす作業には、特許を取得した画期的な手

動式の機械が用いられるようになり、脱穀された粃を木製の大きなスコップですくい上げ、この機械のなかへ放り込むと、内部の篩ふるいと風車を組み合わせた機構によって、粃殻と粃の周りの短い穂や藁などが粃から切り分けられ、作業は格段に効率化したようであるが、その導入以前は、納屋の両端の大扉を一杯に開放し、風下の扉のところに3フィートほどの高さの木製の板を、下に6インチほどの隙間を設けて風が抜けるようにして数枚並べて風上の戸口の床の上に満遍なく粃を巻き広げ、並べた板に堰き止められて勢いを増した風に粃殻と粃の周りの短い穂や藁を吹き飛ばして貰って、粃を戸口のところで食い止める (held) という原始的な方法がとられていたという (*ibid.*)。「脱穀 (thresh) が実際にこのようなやり方で行われていたことから、私たちは戸口のことを「敷居・闕しきみ・蹴け放し (threshold)」と呼ぶようになったのかも知れませんね。」(*ibid.*) というボブ氏の指摘はたいへん興味深い。

20世紀初頭、穀類の大半を占める小麦や大麦は、蒸気機関か馬を動力とした機械で脱穀が行われるようになっていた。コート農場には馬に曳かせるタイプのものに併せて蒸気機関の脱穀機も導入され、ジム氏によると、これを使って、脱穀と藁束作りからその運び出しなどの作業に大人の農夫が13人と見習いの少年が2人従事すれば、一日に藁山ひとつ分の脱穀が可能であったという (*ibid.*)。他方のチャルナーズ農場には馬に曳かせる脱穀機のみが納屋の裏手に設置されており、長さが25フィートほどの木製の梁材を2本、水平に風車の羽根のように十字に組み合わせた器具の十字の4つの端を馬4頭が曳いて、納屋のなかの脱穀機に動力を与えていたが、処理能力という点では蒸気機関に遠く及ぶものではなく、ジム氏によれば、藁山1つを終えるのに、農夫10人と少年ひとりで最短でも2日はかかったそうである (*ibid.*)。

馬に曳かせる脱穀機を発明したのは、スコットランドのアンドルー・マイクル (Andrew Meikle) で、彼がこの機械で特許を取得したのは1788年のことである (Scottish Engineering Hall of Fame, n.d.)。脱穀機の導入によって農場における作業の効率化は進んだ一方、スウィング暴動で知られるとお

り、1830年代、貧しい農夫たちのなかには、畑仕事がなくなる冬場の限られた収入源であった脱穀作業を機械に奪われてしまうのではないかと危機感を募らせ、このままでは自分たちの生活が脅かされてしまうとの思いから暴徒と化する者も現れ、ハンプシア (Hampshire)、ウィルトシア (Wiltshire)、バークシア (Berkshire) などを中心に蔓延^{はびこ}った脱穀機を破壊する暴動の波は、サセックスやケントにも及んだ (The Somborne & District Society, n.d.) というが、ポプ氏曰く、「この辺りの地域では皆無」で、こうした不穏な動きを尻目に、当時農場に導入された脱穀機を初めて目の当たりにしたこの地域の農夫たちは、寧ろ機械の導入を歓迎していたという (拙稿, *op. cit.*, pp. 167-168)。その様子は、彼らの子や孫の世代が今も唄い継ぐ「懐かしの脱穀の歌 (Old Threshing Song)」などからも窺い知ることが出来る。

やっただ、機械のお出ました

小麦も大麦も、ぜんぶきれいに脱穀してくれる、
脱穀だけじゃねえぜ、穀も飛ばしてすぐ売りもんになっちまう、
あとは勇んで、いざ市場へ向かうだけ、

ガラガラガラガラ唄わせて、メアリーを励まし焚き付けて
見慣れた台の上の麦をどんどん放り込んでいくぜ。

コイツを作ったヤツはすげえな。ほ〜んと、よく出来てやがる、
歯車も円盤も、どれもこれもきっちり応えて仕事してやがる。
デケえ円盤が回れば小せえ輪っかが鼻歌で応じ、
ドラムの上に腰掛けて、フィーダーがなかへ麦を放り込んでいく……

歌詞に唄われる「メアリー」が何を意味するかは曖昧で、文字通りフィーダーとして脱穀機を操作する若い女性を激励しているか、「機械 (machine,

or machinery)」を女性として捉え、M で始まる Mary の名を当てた可能性も無きにしても非ずではあるけれど、ボブ氏の娘婿であるジョン・ダドリー (Jon Dudley) 氏によれば、Copper family のなかでは然したる意味のないコーラスとして唄われているとのことである (2019年3月3日付け私信)。ともあれ、このように農村の機械化は進展し続けていったが、ロッティンディーンの農場では、1920年代でもまだ、多くの脱穀は冬期を通して手作業で行われる仕事として農夫たちが請け負っていた (拙稿, 2019b, p. 169)。

脱穀を終えた小麦の藁は、状態の良いものなら水気を切って屋根を葺くための材料として利用され、このような用途には耐えない藁については、細かく挽いて豚の飼料としていた (拙稿, 2019a, p. 149)。麦の恵みを万事無駄にしない農夫たちの姿勢が窺える。こうして脱穀が終わると、畑では鋤引きの作業が始まり、春へ向けた準備へ向けて動き始める。

3. オート麦

小麦の次に播種が行われたのがオート麦 (oat: オーツ麦, エンバク, カラスムギ) である。遅くとも4月半ばまでには播種を終えておかなければならないというのが、当時の農夫たちの感覚だったようで、時機を逸すると実が黒く熟し切らずに茶色くなって家畜の餌にしかならないカックウ・オート (Cuckoo oats) になってしまうこともあったようである (拙稿, 2016, p. 61)。1755年にジョンソン博士の与えた “a grain, which in England is generally given to horses, but in Scotland supports the people” (British Library, n.d.) の定義で知られる作物ではあるが、19世紀末に至ると品種改良も進み、イングランドでも一部庶民の食用として出回るようになっていたことがここから読み取れるが、現実には、多くが依然として馬の飼料用としての生産であった (拙稿, 2016, p. 75)。

播種の手法については先掲の通りで、秋の収穫も小麦に続いて行われた。小麦同様、収穫された後は、畑で乾燥させるため藁山が組まれたが、小麦の

場合とは異なり、オート麦のときは縦横それぞれ8ヤードと5ヤードの長方形に藁山をこしらえた(拙稿, 2019a, pp. 142-143)。こうして畑の上で乾燥の進んだオート麦は、冬場の脱穀を待つ。前述の通り、20世紀初頭に至ると、穀類の大半を占める小麦や大麦は、蒸気機関か馬を動力とした機械で脱穀が行われるようになっていたが、オート麦の脱穀にはまだ原始的な穀竿が用いられていた(拙稿, 2019b, p. 166)。

脱穀が終わると、保管しておくため穀倉にこれを運ぶ作業が続く。ボブ氏は、コート農場でオート麦の脱穀が行われていた際の例として、若かりし頃の父が、1つの重さが2ハンドレッドウェイト(2 cwt=224 pound=約101.6 kg)にもなる麦袋を10袋、馬1頭に引かせる大八車のような二輪放下車(two-wheeled tip-cart)に載せて運ぶ様子を描写しているが、荷車で穀倉まで運び、間に踊り場のある階段を上る階まで持って上がって麦を移し入れ、空になった10枚の袋をコート農場へ戻りに帰るという行程を、一日で11巡こなし、11トンものオート麦を運んだ(拙稿, 2016, p. 66)のだという。

脱穀を終え、籾を落としたオート麦の藁は、専ら牛の飼葉に用いられていた(拙稿, 2016, p. 61)。オート麦の藁は、小麦と異なり茎のなかが空洞になっているため小さな虫が潜んでいることも多く、例えば、羊飼いの寝床のような別の用途に用いられることは無かったようである(拙稿, 2017, p. 37)。

4. 大 麦

ジム氏によれば、ビールの醸造に欠かせない大麦(barley)の栽培はロッチェンディーンではあまり行われておらず、栽培されたのは、天候の具合でオート麦の播種の時機を逸した場合に限られていた(*ibid.*, pp. 60-61)という。但し、ボブ氏が秋の収穫(拙稿, 2018, pp. 166-168)や冬の脱穀(拙稿, 2019b, pp. 166-169)の様子を描いている場面には大麦への言及も見られるため一定程度は栽培が行われていたものと推測されるが、詳細は不明で

ある。

5. ライ麦

ライ麦 (rye) の栽培は、専ら馬の飼料用として行われていた。馬方 (carter) として働いていたジム氏の手記にも、冬には飼葉を与えるが、作物の育つ春や夏には、馬たちが1日に食べる分のライ麦やソラマメ、クローバーなどを刈り取って厩で馬たちに与えていた (拙稿, 2015, pp. 186-187) との記述が見られるが、その他には言及がない。これらは何れも家畜の飼料として役立つだけでなく、被覆作物 (cover crops) として浅い表土を守る役割も担っていたと考えられる (Sussex County Community College, 2021)。

6. 野菜

野菜の栽培に関する記述は、自家用の作物栽培に使用が許された畑と家庭菜園、そして家畜飼料の話に限られており、村の農場で野菜類の大規模な栽培を行っていた形跡はない。

前述の通り、20世紀も半ばに至るまで、農作業は土曜日も全日行われていたが、ロッティンディーンでは、麦類の播種が終わった4月の土曜日のうち1回だけ、午後1時で農場の仕事一切を切り上げ、残りの時間で、地主から割り当てて貰った僅かばかりの畑に自家用のジャガイモの作付けを行うのが習わしであったという (拙稿, *op. cit.*, pp. 76-77)。農夫たちには、地主の好意で、「ひとり当たり8ロッド、見習い小僧には4ロッド」 (*ibid.*) の畑が自家用に割り当てられていた。1ロッドは5.5ヤード、すなわち約5.0292 m幅である。1エーカー、すなわち160平方ロッドの畑を割り振りしていたとすると、農夫ひとり当たり1/5エーカー、つまり約809.372 m²の使用が地主によって許されていたということになる。ジム氏によれば、この畑に栽培したジャガイモで一家が一冬を越すことが出来るくらいの収量を見込むことが

出来た (*ibid.*) そうであるから、作付け面積という点では多分に寛容な広さであったと考えられ、また同時に、この作物が庶民にとって重要な食料であると地主が十分に理解していたことがわかる。種芋は、農場管理の任にあったボブ氏の祖父が仲間たちと共同でスコットランドに大量発注をかけて入手し、農夫たちは、農場から借り出した馬と鋤で耕した畑に、各々自家用のジャガイモの植え付けを行ったという (*ibid.*)。この日は文字通り、「イモ植えの土曜日 (Spud-planting Saturday)」 (*ibid.*) と呼ばれていた。数ヶ月の後、収穫期がやって来ると、再び馬と鋤を借りることが許され、農夫たちは各々ジャガイモを掘り起こして袋詰めにし、わが家へと持ち帰った (*ibid.*)。

また4月の同じ時期には、家庭菜園の準備も行われたようである。ボブ氏の回想には次のようにある。

「農村の4月は、各家庭での庭いじりが盛んに行われる時期でした。平日、厩や農場での仕事を終えると、田舎家の主たちは、浮いたわずかばかりの明るい時間をなんとか最大限に活用しようと、夕食前の時間すら惜しんでまっすぐに庭へと足を運ぶのでした。鋤や熊手が沈みかけの日の光に輝き、鋤き返したばかりの土の匂いと、十分に腐敗の進んだ厩の肥やしの芳醇な香りを乗せた空気は、何とも心地よいものでした。」 (*ibid.*, p. 68)

このように、春分の日を過ぎて長くなった昼間の時間を活かして、農夫たちは農場の仕事の後、自宅敷地内にある菜園の土を起こし、野菜の種を撒く作業に勤んでいた。緯度の高いイギリス諸島では夏期の日照時間が長く、ロッチェンディーンのあるイーストボーンの4月の日照時間は、月初の1日が12時間56分06秒 (6:35-19:31) であるのに対し、月末の30日になると14時間43分04秒 (5:35-20:18) と1ヶ月の内に約2時間も延び、6月の夏至に至ると昼間の長さは16時間30分15秒 (4:45-21:15) にも及ぶ (Time and

Date, 2022)。これは、日照時間が8時間足らずとなる冬至 (*ibid.*) より8時間半以上長く、夏至の京都の14時間30分54秒 (4:43-19:14) (Maplogs.com, 2022) と比較してもおよそ2時間長い。Summer Time Act によってイングランドに夏時間が導入されるのは1916年のことであるが、それ以前、夏至の日の出が時計の上では3:45頃であったことを考えれば夏時間導入は理に適ったことであつたと言わざるを得まい。尤も、導入当初は混乱も多くあつたようで、ジム氏がこれを表して「お天道様と戯れんがために時計をごそごそいじくり回し始める」(拙稿, 2018, p. 160) と書き残している点は興味深い。ともあれ、この長い夏期の日照時間をロツティンディーンの農夫たちは有効活用していた。

ボブ氏は、こうして種撒きを終えた家庭菜園の様子を次のように描写している。

「……腰を伸ばして起き上がり、振り返ると、きれいに熊手をかけた畑には、溝を刻んでまっすぐきちんと均された畦が幾列か並び、それぞれに目印として空になった種袋をかぶせた棒が突き立ててあります。そんな光景を眺めていますと、脳裏には、やがて芽吹くソラマメとサヤエンドウの新芽が何列にも並ぶ光景や、自らの暮らす田舎家の壁に何本も張られた長縄につるされ、9月の陽光の下で熟していくたくさんのタマネギの姿が浮かぶのでした。」(拙稿, 2016, p. 68)

地主から許しを得て畑でジャガイモを栽培し、家庭菜園では様々な野菜を育て、農夫たちは、家族で食す食料を確保していた。10月の項には、「ニンジン^{たるき}は霜で悪くならないよう庭に藁で覆ってありましたし、タマネギは、納屋の垂木から長い紐を張っていくつも吊してありました。「青物」ならキャベツ畑からいくらかでも取ることが出来ました。」(拙稿, 2019a, pp. 148-149) とあり、冬にも困らないだけの食料の得られていたことがわかる。

他方、*A Song for Every Season* に農場における野菜栽培の様子は描かれていないが、冬場の家畜用飼料については、農耕用の雄牛の飼料として「オートの麦藁とカブハボタン (swede: ルタバガ, スウィード, スウェーデンカブ) という根菜」を与えていたとの記載があり、カブ (turnip) を導入したノーフォーク農法 (Norfolk four-course System) の一種がこの村でも実践されていたことが窺える。

7. 農 法

19世紀も後半に至れば、ロッティンディーンでもイギリス産業革命の礎となった18世紀前半の農業革命によって普及した新しい農法、すなわち、中世以来の三圃式農業 (three-field system) に冬場の家畜飼料用にカブの栽培を組み合わせたノーフォーク農法が普及していたとしても何ら不思議はない。これは、連作障害を抑制するため、小麦 (wheat)、カブ、大麦 (barley)、クローバーもしくは牧草 (clover/grasses) を4年周期で畑地を入れ替えて栽培する一種の輪栽式農法である (Martins, S. W. & Williamson, T., 1999, p. 99)。三圃式農業にあっても、牧草の得られる春夏の休耕地には家畜が放たれ、牛や羊たちの糞が畑の養分となって畑の土をある程度蘇らせることが出来ていたが、冬場には草が枯渇し、飼料も不足するため家畜の飼育が困難になるという難点があった。この問題を、間作物 (break crop) として栽培したカブを冬に向けて蓄え、家畜の飼料とすることで解決したのが、文字通り「ターニップ」・タウンゼントの異名を取るタウンゼント子爵 (2nd Viscount Townshend, 1674-1738) であったことは周知の通りである。

6月頃に種を撒いたカブが大きく実るのは、冬場の11月から年末年始の頃である (國方, 2020, pp. 3-4)。一般的なノーフォーク農法では、こうして栽培されたカブを収穫するのではなく、家畜を畑に連れてきてそのまま食べさせていた。例えば、羊の群れを飼育している地域なら、畑に「羊欄 (sheepfold)」を設け、まずは子羊 (lamb) たちのみをその仕切りのなかに

放ち、実ったカブを食ませる。翌日、この子羊たちは別の羊欄のなかへ入れられまたカブをかじるが、生後12ヶ月以内で成歯を持たない子羊たちに食み得る部分は限られているため、前日に子羊たちのいた羊欄には、これより大きな子羊 (teg) や、出産を控えた雌羊たちが入れられて、子羊が食べ残した根菜のみならずカブの葉から茎に至るまですべてを食べ尽くし、裸地だけが残される (*ibid.*, p. 8)。こうして畑のカブを食べて栄養を補給した羊たちの落とす糞が、土を滋養するというのがノーフォーク農法の標準的な形態であった。

これと同様のことはイングランド南岸でも行われていたようであるが、温暖なロッティンディーンでは、カブではなく、アブラナの畑がこれに充てられていた。残念ながらその詳細は不明であるものの、「羊たちの放牧用の畑」という意味合いでこれを“lambing rape”と称していたところからすると、おそらくこれも、最初は子羊、次に雌羊といった順に放牧が行われ、無駄なく食ませるという手はずが取られていたものと思われる。ボブ氏の娘婿、ダドリー氏にかつてご教授いただいたところに依れば、“Lambing rape means green stuff grown for the purpose of feeding sheep by means of turning them out into a section of the rape greens which was fenced off...when they had eaten that part of the rape greens they would fence off another section and the sheep would feed on that until it was gone and so on until all had been eaten.” (2016年3月11日付け私信) とのことで、栽培されていた作物こそ異なるものの、用途および手法については上記「羊欄」の概要とも合致する。但し、ジム氏の手記にも「種撒きが終わると、広い休耕地を山ほど鋤き起こす仕事が残っていた。アブラナの種撒き支度だ。」(拙稿, 2016, p. 69) とあるとおり、初夏に播種を行い初春に開花時期を迎えるアブラナは、冬を越えた後の飼料であったと考えるのが妥当である。温暖なロッティンディーンでは、冬場でも丘の上での羊の放牧が可能であった。風の強い冬の丘で羊飼いたちが羊を追う様子は、ボブ氏も1月の一場面として描写してい

る（拙稿，2016，pp. 173-179）。つまり、ロッティンディーンの場合、羊欄を用いた飼育は、冬場の家畜の栄養源確保というより、どちらかと言えば畑の滋養のためという意味合いが大きかったものと考えられる。

ロッティンディーンでは、輪作のひとつとしてクローバーの栽培も行われていた。これは先述の通り、主に馬の飼葉に混ぜて与えるためのもので、羊飼いたちは常に、クローバー畑へ羊の群れを迷い込ませないように注意を払っていた（拙稿，2015，pp. 176-177）。

冬場の家畜用飼料として、19世紀末以降のロッティンディーンでは、カブではなく「マンゴールド（mangold）」というドイツから導入された飼料用ビーツ（Mangelwurzel）を栽培していた。栄養が豊富であるだけでなく、病害に比較的強く、土地を選ばず多収が望めることが理由であったと思われる（雪印種苗株式会社，1969）。食用の赤いビーツとは異なり黄色味があった根を実らせるこのマンゴールドのことを、サセックスでは「マングル（mangle）」と呼び、キャベツと併せて飼料用に多く栽培していたようである。ジム氏の手記にも以下のようにある。

「干し草がぜんぶ片付いたらすぐ、今度は収穫のことを考えなくちゃなんねえんだが、その前に、マングルとキャベツの作付けのために^{くわ}鋤入れをしなきゃならなかった。これも出来高払いでよ、単純明快1エーカーにつき1ポンドってことになってた。全体に2回鋤を入れて、さらにもう1回鋤^{なら}で均してようやく種撒きよ。マングルもキャベツも大量に作ってたぜ。冬の間、乳牛に食わせるためさ。マングルを20エーカーぐらいと、キャベツが12から15エーカーだったかな。おかげで忙しかったもんさ。これが終わらなきゃ収穫のことなんぞ考えられやしねえ。」（拙稿，2018，pp. 166-169）

このように、ロッティンディーンで栽培されていたマングルとキャベツは主

に乳牛用であった。但し、前掲の羊欄のような方法で牛たちに畑で食ませるのではなく、以下のように、一旦収穫して保存していたようである。

「……麦藁を全部なかへ取り込んで覆いを掛けたら、お次はマンゲルの番だ。上に伸びた葉を切り落とし、畑から引っこ抜いて台車に乗せて運び、納屋へ放り込む。まあ、しまい込むってことよ。丸一日がかりの仕事さ。朝の6時半に男6人で指示をもらいに行つて、畑へ行つて引っこ抜き、葉を落としたあたりで11時。昼メシだ。メシが終わったら、馬の曳き荷車が3、4台か、多いときは6台、いや一番多かったときは8台来たかな。デカイ農道から畑までの距離次第よ。オレたちちいつも舗装された道の近くに荷車を寄せてマンゲルを放った。そうすりゃ馬一頭で牛小屋まで運んでいけるからな。4人は畑に残つて穴ほこの土を均し、2人が抜いたマンゲルを放下車に乗せて道端まで運び、馬車の荷台へ放り込む。で、小僧たちが馬の手綱を引いて繰り返し畑と牛小屋を行き来するわけだ。抜いたマンゲルはその日のうちに必ず運び出さなきゃならなかった。霜にやられちゃうからよ。」(拙稿, 2019a, p. 149)

理由は記されていないが、ロッティンディーンの場合は、畑で食ませるのではなく、納屋に保存しておいたマンゲルを飼葉に混ぜて乳牛に与えるという方法が取られていたようである。國方(2022)も指摘する通り、ノーフォーク農法は多種多様で、地域ごとの気候風土に合わせて様々に変容を遂げ発展していった。サヤエンドウ(spring bean)のような間作作物(break crop)の導入(Gillbard, 2021)などもその一例で、こうした進化の先に各地域特有の混合農業(mixed farming)の基礎は築かれた。農場によって異なるようではあるが、近年のサセックス州における輪作は、秋撒き小麦(winter wheat: 冬小麦)、春撒き大麦(spring barley)を軸に、間作作物としてアブラナ(oilseed rape)や、サヤエンドウ(spring bean)を組み合わせた

ものが主流のようである (Impey, 2018)。馬の飼料需要が減少したことでオート麦の生産も減少し、また牧羊業の衰退によって、もはや家畜ありきの農業形態ではなくなってしまっている。

VII. むすびにかえて

本稿では、ボブ・コパー氏の *A Song for Every Season* を地誌学上の資料と位置づけ、ロッティンディーンの地域特性を分析する第一段階として、主要産業のひとつである農業に焦点を当てて考察を行った。その結果、19世紀末から20世紀初頭へかけてのこの村が、海に面した地の利を活かす漁業ではなく、白亜質の丘の上に広がる浅い表土を手塩にかけて育て、長い日照時間と温暖な気候を最大限に活かしながら、麦類の栽培を中心とした農業を発展させてきた村であり共同体であったこと、そして、ノーフォーク農法の導入以降この地域に根付いた混合農業を、農夫たちがともに手を携えて進化させ、代々継承してきた様子の子細に亘って辿ることが出来た。時に刃を向く自然環境と対峙しながら、農夫たちはこの村特有の文化景観を創り上げてきたのである。

地誌とは、特定の地域における自然、人文諸事象の相関を総合的に考察、記述するものである。気候に関する特性は、先掲のとおり数値化された客観的な気象データから読み解くことの出来る事柄もあれば、天候の変化が人間の生活や生業に与える影響などは、例えば、最悪の事態を回避するため長い年月をかけて紡ぎ出してきた農夫たちの経験則や、多くの収穫を得るため気候の変化をいち早く察知して播種や収穫のタイミングを計る彼らの相貌的知覚といったところに目を向けなければ垣間見ることは出来ない。今回焦点を当てた農業に関する情報に限っても、ボブ・コパー氏の著書には、彼が生まれ育ったロッティンディーンという小さな村の農事に纏わる詳細だけでなく、それに関連したこの村の地誌を構成する詳細な情報が^{ちりば}鑲められている。無論、記憶を少なからず美化している嫌いのある箇所も幾らか見られるものの、公

刊され、大きな批判や修正を求められること無く一定の評価を得ているという点では相応の信憑性も担保されていると見て良いであろうし、その点では、フィールドワークによって収集し得る情報に比類する、あるいはそれを凌ぐ価値を有していると言っても過言ではあるまい。こうした貴重な情報を活かすことで100年前の人文景観の一端を再構成し、地域特性を導き出すことは可能となる。

紙幅の関係上、今回この地域におけるもうひとつの生業である牧羊や、庶民の生活空間、余暇などについては扱うことが出来なかった。別稿を期したい。

主要参考文献

- Copper, B. (1971). *A Song for Every Season*. Heinemann. xiii + 288 p; (1975) Flamingo. 304 p; (1997) *Coppersongs*. vii + 233 p.
- Elphick, G. P. (1970). *Sussex Bells and Belfries*. Phillimore. xx + 247 p.
- Martins, S. W. & Williamson, T. (1999). *Roots of Change—Farming and Landscape in East Anglia, c. 1700–1870* (Agricultural History Review Supplementary Series 2). British Agricultural History Society. 228 p.
- The Copper Family. (1995). *Song Book—A Living Tradition*. *Coppersongs*. xvi + 113 p.
- アリエス, P. (1980). 『〈子供〉の誕生 アンシャン・レジム氏期の子供と家族生活』。みすず書房。v + 440 ; xxixp.
- 湯山健一 (2003) 「郷土という幻想—民謡の場所とは」 「郷土」研究会 『郷土 表象と実践』 (pp. 132-152) 嵯峨野書院。
- (2015) 「A Song for Every Season (1)」。 *Asphodel* 50. pp. 170-191.
- (2016) 「A Song for Every Season (2)」。 *Asphodel* 51. pp. 58-81.
- (2017) 「A Song for Every Season (3)」。 *Asphodel* 52. pp. 22-46.
- (2018) 「A Song for Every Season (4)」。 *Asphodel* 53. pp. 154-173.
- (2019a) 「A Song for Every Season (5)」。 *Asphodel* 54. pp. 139-162.
- (2019b) 「A Song for Every Season (6)」。 *Asphodel* 54. pp. 163-183.
- 國方敬司 (2020) 「羊欄とはなにか—イギリス農業の一面—」 『山形大学紀要 (社会科学)』 第51巻第1号。 pp. 1-17.
- 國方敬司 (2022) 「イングランドにおける農業革命と人口 (1) : 軽土地革命」 『山

形大学紀要 (社会科学)』第53卷第1号. pp. 1-33.

主要参考資料

- Ancestry. (2022). John Edward Beard.
<https://www.ancestry.com/genealogy/records/john-edward-beard-24-ng17rb>
[Retrieved on 6 September 2022]
- Bevendean History Project. (n.d.). Obituary for Mr. Steyning Beard.
http://www.bevendeanhistory.org.uk/estate/stories_from_bev_estate_028b.html
[Retrieved on 6 September 2022]
- British Library. (n.d.). Johnson's Dictionary—Oats.
<http://vll-minos.bl.uk/learning/langlit/dic/johnson/oats/oats.html>
[Retrieved on 6 September 2022]
- Copper, J. (2004). Copper the Family -A History of Family and Music.
<http://www.thecopperfamily.com/assets/the-copper-family-history.pdf>
[Retrieved on 6 September 2022]
- Current Results-weather and science facts (2022). Average Sunshine a Year in the United Kingdom.
<https://www.currentresults.com/Weather/United-Kingdom/annual-sunshine.php>
[Retrieved on 31 August 2022]
- Gillbard, E. (2021). Guide to growing a successful spring bean break crop.
<https://www.fwi.co.uk/arable/pulses/guide-to-growing-a-successful-spring-bean-break-crop>
[Retrieved on 3 September 2022]
- GOV.UK (n.d.). Climate and weather. Climate Change.
<https://climate-change.data.gov.uk/climate-weather>
[Retrieved on 23 August 2022]
- Homebrew Brighton (2022).
<https://homebrewbrighton.co.uk/brighton-beer-water-treatment/>
[Retrieved on 31 August 2022]
- Impey, L. (2018). Why a Sussex farmer changes his crop rotation.
<https://www.fwi.co.uk/arable/crop-selection/rotations/weed-pressure-forced-rotation-changes-one-sussex-farm>
[Retrieved on 3 September 2022]
- Institute of Historical Research, University of London (nd). Parishes: Rottingdean.

- British History Online.
<https://climate-change.data.gov.uk/climate-weather>
 [Retrieved on 23 August 2022]
- Maplogs. com. (2022). 日本, 京都府京都市, 日の出・日の入り時間.
https://sunrise.maplogs.com/ja/kyoto_kyoto_prefecture_japan.712.html
 [Retrieved on 5 September 2022]
- Met Office (n.d.). Eastbourne. Historic station data.
<https://www.metoffice.gov.uk/pub/data/weather/uk/climate/stationdata/eastbournedata.txt>
 [Retrieved on 23 August 2022]
- (n.d.). Monthly, seasonal and annual total duration of bright sunshine for England S.
https://www.metoffice.gov.uk/pub/data/weather/uk/climate/datasets/Sunshine/ranked/England_S.txt
 [Retrieved on 31 August 2022]
- (n.d.). Monthly, seasonal and annual total duration of bright sunshine for Scotland.
<https://www.metoffice.gov.uk/pub/data/weather/uk/climate/datasets/Sunshine/ranked/Scotland.txt>
 [Retrieved on 31 August 2022]
- (n.d.). Monthly, seasonal and annual total duration of bright sunshine for UK.
<https://www.metoffice.gov.uk/pub/data/weather/uk/climate/datasets/Sunshine/ranked/UK.txt>
 [Retrieved on 31 August 2022]
- Scottish Engineering Hall of Fame (n.d.). Andrew Meikle—Engineer and the Inventor of the Threshing Machine.
<https://engineeringhalloffame.org/profile/andrew-meikle>
 [Retrieved on 9 September 2022]
- Smith, R. (n.d.). A Dictionary of the Sussex Dialect - online book: A Collection of Provincialisms in use in the County of Sussex.
<http://www.sussexhistory.co.uk/sussex-dialect/sussex-dialect%20-%200190.htm>
 [Retrieved on 23 August 2022]
- Sussex County Community College (2021). What's New in Agriculture.
<https://www.sussex.edu/academics/degrees/horticulture-science/sccc-student-farm/whats-new-in-agriculture/>

[Retrieved on 3 September 2022]

The Somborne & District Society (n.d.). The Swing Riots of 1830.

https://www.thesombornes.org.uk/village_org_page.php?page_id=204

[Retrieved on 10 September 2022]

Time and Date (2022). Eastbourne, England, United Kingdom—Sunrise, Sunset, and Daylength, June 2022.

<https://www.timeanddate.com/sun/uk/eastbourne?month=6&year=2022>

[Retrieved on 5 September 2022]

京都市 (n.d.) 「京都市におけるエネルギーを取り巻く現状と課題」

https://www.city.kyoto.lg.jp/kankyo/cmsfiles/contents/0000156/156463/08_DATA3b.pdf

[Retrieved on 31 August 2022]

雪印種苗株式会社 (1969) 「家畜ビート品種の使い分け」『牧草と園藝』第17巻第9号

https://www.snowseed.co.jp/wp/wp-content/uploads/grass/grass_196909_01.pdf

[Retrieved on 4 September 2022]